

学会ハイライト

8th World Congress of Itch (WCI国際痒み学会) を終えて

(平成27年9月27日(日)～29日(火), 奈良春日野国際フォーラム薨)

片山 一郎

大阪大学大学院医学系研究科皮膚科教授

はじめに

痒みに関する国際学会「8th World Congress of Itch (WCI)」が秋晴れの下、奈良の春日野国際フォーラム薨で開催された(図1)。日本での開催は2003年の富山(富山大学, 倉石泰先生), 2009年の東京(順天堂大学浦安病院, 高森建二先生)に次いで, 今回が8回目となり, 私が会頭を務めさせていただいた(図2)。第1回大会は2001年に当時シンガポールのNational Skin Center, National Medical Research Councilに勤務されていた, 現 米国Temple

大学教授で, 痒み研究では世界的に有名なGil Yosipovitch先生がシンガポールで開催された。私も長崎大学の教授時代でケラチノサイトが産生する神経ペプチドに関する演題を出していたが, 出発直前にあの9.11事件がおこり, また10月に西部支部大会の会長を務めることになっていたこともあり, 出席を断念したことを思いだす。そのときの出席メンバーがコアメンバーとなり, 2005年にIFSI (International Federation of Society of Itch) が設立され, 招待会では室田事務局長のお世話で10th Anniversary Cakeが皆さんに振るまわれた。



図1 左：学会のブックマーク(室田浩之事務局長作成) 右：奈良春日野国際フォーラム薨



図2 会長挨拶。過去の開催場所、年度を紹介。

特別講演

Bernhand Lecture : Sonja Ständer (Center for chronic pruritis, University Hospital of Münster) : 前理事長のStaender教授は「Lessons from the clinic : The ice pack sign and more」というタイトルで講演された。日常診療でみられる慢性の痒みには個々の患者で病因の異なるさまざまな病態がみられること、そのなかで神経原性のbrachioradial pruritis (BRP) は dysesthesia and itch と呼ばれ、皮膚の知覚神経の機能障害で寒冷刺激に対しての知覚低下が生じるとの内容であった。Ständer先生はご主人も皮膚科の開業医で、今回も出題されていた。また Special interest groups of IFSI (SIGs) の中心メンバーとして、悪性腫瘍、透析、神経原性疾患などの痒みの疫学研究や痒みの客観的な評価法の確立に向けて、世界の痒みに関する臨床研究をリードされている。

Kuraishi Lecture : 順天堂大学浦安病院の高森建二先生が「Message from nerve fibers involvement of nerve fibers in intractable itch in atopic dermatitis」というタイトルで、高森先生が長年にわたり研究されてきた末梢神経の表皮内への進展と痒み過敏に関わる分子機構の最新の知見を講演された。

プレナリー講演

18演題が発表された。

IL31と痒み : ダブリン大学のPAR2研究で有名なMartin Steinhoff先生は痒みの新しいメディエーターを標的とする次世代の治療戦略を述べた。IL31は痒みの伝達だけではなく、NGFとは別個に脊髄後角の知覚神経の増生と進展に関与するという新しい知見を発表した。この反応はSTAT3依存性かつTRPV1非依存性とのことでSTAT3 inhibitorがこの反応を抑制することから炎症で増幅する痒みの制御にIL31抗体やSTAT3阻害薬が効果を示す可能性を示された。また endothelin-1 (ET-1) はヒスタミン非依存性の痒みに関与するというJ Clin Invest. 2014 ; 124 : 2683 (Kido-Nakahara M et al.) に発表されたデータをもとに講演された。

astrocyteのSTAT3活性化と痒みの増幅 : 脊髄レベルでの知覚の制御や増幅機構に関して、九州大学薬学部の津田先生はマウスの搔破行動モデルにおいてTRPV1陽性のC- fiberにより伝わる痒み感覚が脊髄後角astrocyteのSTAT3を活性化し、lipocalin 2の誘導を介して、GRP (gastrin releasing peptide) 依存性の痒み感覚を増幅するという非常に綺麗な報告をされた。皮膚での炎症による痒みや痛みが知覚神経に及ぼす影響の新しい機序とし



図3 新理事：能舞台を背景に。

て、新たな創薬開発に繋がるかと考えられる。皮膚炎の発症した領域の支配神経に一致した脊髄でよりその発現がみられたが、乾癬などのモデルで同様の変化がみられるかは未検討とのことであった。この成果はNature Medに報告され、著者である林先生は今回から新設されたHermann O Handwerker賞(副賞2,000ドル)を受賞された。

Future Perspective：カリフォルニア大Davis校のCarstens教授は味覚におけるTRPチャンネルの世界的な研究家であるが、今後の痒み研究の方向性を多方面の研究成果をもとに述べられた。またご自身の研究としてTRPV1, TRPA1陽性末梢神経が搔破や温熱刺激で活性化することでヒスタミンあるいはMRGPA3誘発性の痒みを抑制することを報告した。

一般演題のトピックス

胆汁鬱滞などでみられる痒みにautaxinであるlysophosphatidic acid (LPA) が関与することが話題になったが、その痒みにH1Rアンタゴニストが効果を示すことを防衛医科大学校の端本先生が報告された。ボストンのEthan Lerner先生はサブスタンスPがヒスタミン非依存性の痒みを誘導すること、ヒトMRGPRX2のリガンドとして作用する

こと、その拮抗薬がヒスタミン非依存性の搔破行動を抑制することを報告し、サブスタンスP阻害薬の新しい可能性を示された。室田先生は温まると痒くなる機序を述べられ、今後、マンガンを用いるmangan-enhanced MRIの痒み研究への応用に言及された。Yosipovitch先生のグループは乾癬のモデルマウスでの痒みの増幅機序や抗IL17A抗体の効果などについて報告し、議論を呼んでいた。ただ乾癬患者の痒みはサブスタンスPなどが関与するとの報告が以前からあり、IL17Aのシグナルとどう関係するか興味もたれる。ただネズミの話がどこまでヒトの疾患に適用可能かはむずかしい。むしろヒトでの新しい脳機能解析機器を応用していくほうが早いかもしれない。いずれにしてもこの数年の痒み研究の勢いは素晴らしく、若い皮膚科医にも是非参入してもらいたい。図3は最終日の理事会後に新理事が集まった写真で、若手の第一人者Martin Schmerz先生が新理事に就任された。

痒み研究と皮膚病診療

今回、普段よく会う皮膚科の先生、とくにアレルギーを専門とする先生の姿を会場、討論などで目にする機会が少なかった。皮膚科医はまず皮疹



図4 木原宗郁先生(裏千家)とそのお弟子さんたちによる呈茶を楽しむ参加者。

をみることから臨床医としてのスタートを切る。臨床経験を重ねる過程で患者の全身的な背景因子を加味して皮疹を視、そして、観る。さらに患者のすべてを考慮しながら、皮疹を診て治療を考え、ときに看とり、その結果をサイエンスとして記録していく。痒みは皮膚科医にとりその実体が捉えにくいと普段から思っているが、そのことがアトピーを専門とする皮膚科医の参加が少なかった理由と考えると、その点は大いに反省すべきであり、

今後は是非、臨床、基礎の若い先生の力で皮膚科医のこの分野への参入を考えていただければと思う。

懇親会、アトラクションなど

今大会は初日から期間中を通じて、大変天候に恵まれ、皆さん学会の合い間に世界遺産の寺院、神社、仏像を楽しまれ、夜のガーデンパーティでは、偶然初日が中秋の名月、翌日がスーパームー

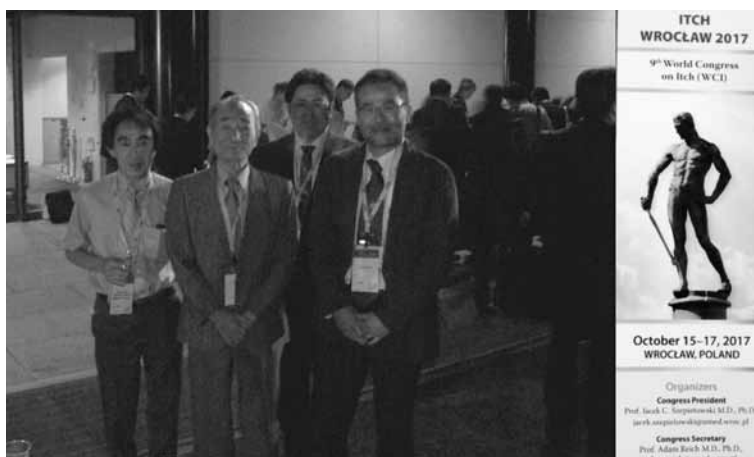


図5 懇親会にて。左から佐藤貴浩、西岡清(本誌編集委員長)、端本宇志、室田浩之(事務局長)先生。右は2017年大会の開催案内。

ンとのことで、名月を愛でながらの活発な討論が繰り広げられた。当初は奈良の知名度の低さから、参加者の数など心配していたが、最終的には230人を超す参加者があり、初日の金春流の能「高砂」で皆さん一気に奈良が気に入ったようである(図3)。また教室秘書の光山さんのお世話で、木原宗郁さんとお弟子さんたちに2日間にわたり、抹茶サービスを提供していただき、皆さん大喜びで写真撮影をされていた(図4)。

おわりに

事務局長として2年前のボストンでのプレゼンテーション以後、理事の先生方からの多くの要望

の調整、プログラムの作成、共催企業との連絡などお一人で獅子奮迅の活躍をされた室田浩之先生、たくさんの学会写真を撮っていただいた教室秘書の杉山さん、学会事務ですばらしいおもてなしをしてくださった日本皮膚科学会コンベンション担当のスタッフにも心より感謝いたします。

第9回は2017年10月にポーランドWroclawでJacek Szepietowski教授により開催される予定で多くの先生の参加を期待しております。ちなみにWroclaw Medical Collegeにはかつてウイーン大学に留学されていた土肥慶蔵先生が一時期在籍されていたそうです(図5)。